# キンセイランにひかれて

札幌郡広島町　高　野　秀　樹

私は広島町に住むようになって、早くも6年になった。自然環境のすばらしいところで、広々とした大地にゆるやかな丘陵が続いていて、その谷間にはところどころに小さな川がひっそりと流れている。北の方には野幌の原始林があり、また家の近くには「レクの森」もあるので、家族連れで自然を楽しむにも恰好の場所となっている。このような土地であるから動植物の種類も豊富で、特に植物については400種以上といわれている。

自称カメラ狂の私は、出勤前の早朝や休日を利用して、愛機を肩に林の中を散策するのが、いつの間にか習慣になってしまった。

晩秋のある日、私はいつものように林の中を歩いていると、見なれない葉が目についた。近づくと「これはランだ」と直感した。葉の巾は細く（1.5㎝）葉柄はなく、数枚の濃緑色の葉が根ぎわに群生していた。全体的に見ると、見馴れたサルメンエビネよりややひ弱に思われた。数日後この時のことを父に話すと、どうもキンセイランの葉らしいことがわかった。

キンセイランは深山の林の縁などに自生するエビネの仲間で稀種に属することを聞き、どんな花が咲くのだろうかと、来年の出合いを楽しみ、思わず胸が高鳴った。

広島町は人口42,000人で、現在では札幌市のベットタウンとして年ごとに発展を続けている。北方山草会でいろいろご指導をいただいている外山雅寛氏のお話によると、以前広島町にお住まいの頃は、やはり近くでアツモリソウも自生していたとのことであった。私の観察したところでも、アオチドリ、ギンラン、ササバギンラン、コケイラン、トケンラン、サルメンエビネ、スズムシソウ、ジガバチソウ等、他の地域に比べラン科の植物が、多く自生している土地であるらしい。やせた火山灰地で、風の強い冷涼な気候、そして広葉樹林、針葉樹林などの豊かな雑木林などが、ラン科にとっても住みよい環境をつくっているのではないかと思われる。

北国の長い冬も過ぎて、再び春が訪れると広島町の林には、ザゼンソウの大群落があちこちに見られ、また丘陵地帯の南斜面には、フクジュソウが顔を出し、黄色い花が一面に咲いていた。

5月になるのを待って、問題のランの自生地に行ってみると、まだ越冬状態のままで著しい変化はなかった。今シーズンは花が咲かないのではないかと心配になった。林の木々は若芽をつけ、ヒメイチゲ、ニリンソウ、タチツボスミレが咲きそろう頃、広島の森は野鳥の楽園である。ヤマゲラのキョー、キキョー、キョーと大きな声が林の中に響きわたり、キビタキ、アカハラも競いあうように、山の歌い手たちの大合唱となる。

6月に入ると林の中は新緑の季節となり、木々の間から差し込んでいた陽の光は、若葉によってさえぎられ蔭をつくる。中旬頃あのランを見に行くと、やっと若葉をもち上げてきたところであった。その後見る度に花茎も伸びているのになかなか花は咲くようすもなく、いら立った。

近くの林にはサルメンエビネが咲きほこっていた。キンセイランとは近縁といわれているこの花は、花茎が30cmほど伸び、唇弁は朱紅褐色をしている。その花形は能面の猿に似ているところからサルメンエビネと名づけられたといわれている。

いよいよ7月の中旬になった。今日こそはという思いで針葉樹林に入っていくと、うす暗い光の中で、下草の中から黄色い花が目についた。待ちに待った開花である。全長30cmほどの大きさで、黄緑色のがくは先が針のようにとがりめくれている。唇弁は淡黄色で垂れ下がっていた。サルメンエビネのような派手さはないが、鋭角的に洗練された美しさが漂っている。やはり父のいっていたキンセイランであった。待ちに待っていた花は、まわりの緑の静寂の中で、ひときわ輝いているのをしばらくうっとりと眺めていた。心をしづめながらカメラを据え、じっくりと目で確認するようにシャッターを押した。

キンセイランの花は2週間ほど咲き続けてその後少しずつ褐色に変わり萎れていった。私とキンセイランとの出合いは、花の少ない時期だけに深く心に残った。

文献によればキンセイランの名の由来は古くから金星、金晴、金清等の文字をあてはめたらしい。うす暗い林の中で鋭角的な黄色い花の輝きは、まさしく金星蘭といえよう。

キンセイランの産地について、日本では北海道、本州、四国、九州と記されている。その分布は〔図〕のとうりである。

参考文献

原色日本のラン　前川文夫著（誠文堂新光社）

エビネとその仲間　伊藤五彦・唐沢耕司著（誠文堂新光社）

キンセイラン（C. nipponica）の分布